



中国黒龍江省ハルビン市平房に残る731部隊のボイラー室跡

# 731部隊

## 埋もれていた細菌戦の研究報告

### 渡辺延志

わたなべのよゆき ジャーナリスト。一九五五年生まれ。朝日新聞社に勤務し、東京本社で一〇年にわたり主に歴史にかかわるニュースを手がけた後、二〇一一年から千葉総局員。独自に史料の発掘・解説を続け、本誌二一年七月号に「虚妄の三國同盟」を執筆。

### 石井機関の概要金子軍医の論文集発見

埋もれていた研究報告

旧日本陸軍で細菌兵器の開発や製造を担った731部隊(関東軍防疫給水部)をめぐる、新たな資料が出現した。中国で行った実戦を根拠にしたとして細菌兵器としてのペスト菌の「効果」を分析した研究報告書だ。

発見されたのは金子順一軍医の論文集。東京大学に提出し敗戦後の一九四九年一月に医学博士号を受けたものだ。五〇万人分の博士論文を収蔵する国会図書館関西館で、731部隊に関わりのあった医

学者らの論文を調査してきたNPO法人

「731部隊・細菌戦資料センター」の理事で埼玉県在住の奈須重雄さんが見つけた。

論文集は八点の「陸軍軍医学校防疫研究報告」(防研報告)を合冊していた。

731部隊を率いた石井四郎(敗戦時の階級は軍医中將)の提唱で陸軍軍医学校

(東京)に設けられた防疫研究室(防研)の研究紀要で、論文一点ごとに一冊として印刷されたものだ。

論文のタイトルは以下の通りである(部と号は防研報告の種別と通番で、日

付は論文の受付日)。

主論文は「雨下撒布の基礎的考察」

(第一部四二号、四一年八月二一日)。さらに、

▼「低空雨下試験」(第一部四二号、四〇年六月七日)

▼「PXの効果略算法」(第一部六〇号、四三年二月一四日)

▼「滴粒による紙上斑痕について」(第一部六二号、四四年二月七日)

▼「X・Cheopisの落下状態の撮影」(第一部六三号、四四年二月二四日)

▼「シロネズミより分離せるゲルトネル菌の菌型」(第二部七九一号、四四年一月一

七日)

▼「X・高空撒布に於ける算定地上濃度」(第一部八一号、四四年六月一六日)

▼「火薬力に依る液の飛散状況」(第一部八二号、四四年七月一日)

が綴じられていた。

目を引くのが「PXの効果略算法」である。Pはペスト菌で、Xはペスト菌を最も増殖させるとされるケオプスネズミノミであり、PXとはペスト菌に感染したノミのことである。

表紙には「陸軍軍医学学校防疫研究室(部長 石井少将)」とあり、ついで「陸軍軍医少佐 金子順一」と執筆者の名前があり、その下に太めの活字で「軍事秘密」と刷られている。

この論文は八章からなっている。

第一章「緒言」は「兵器の具備すべき条件の一つとして、その使用量とこれによる効果との関係が明らかである必要性を考えねばならぬ」と説き始める。PXを「現有兵器中その質及び特性において最も優れた弾種のの一つ」と評価し、「PXの効果はその直接罹患致死作用のみを

目途としてもこれを決定する因子が複雑多岐であるため、これを爆弾による理学的作用の如くに取り扱いすることは不可能である」としたうえで、「PXを兵器として取り扱う以上は、少なくともこれによって期待されるべき効果は、何らかの手段によりある程度までは概算しえることが必要だ」と論文の狙いを説明する。

どのように動くか制御できないペスト菌感染ノミだが、兵器として使うためには、あらかじめ効果を推定する計算式が必要で、それを考案した研究だということである。

そのうえで、こう記している。

「幸いにして既往数次に渉る作戦はこの種の問題の解決に重要な基準を与える」

予測は難しいのだが、実戦を重ねてきた私たちには根拠となるデータがあるので、可能なのだとの主張である。

第三章「前提及び仮定」では、「効果」を「第一次感染と第二次流行とよりなる」と定義している。またペスト菌感染ノミによって直接人間が感染した場

合が一次感染で、ノミが現地のネズミにとりつき、そのネズミを介して現地のノミが毒化して発生させるのが二次流行で、生物兵器としての「効果」はその両者の合計であるというわけである。

「効果」をめぐるのは「細菌戦の効果の真諦は精神的経済的恐慌を招来するにある」としたうえで、「吾人はまず直接罹患致死効果を大ならしむる様に努力する事に依って任務を完遂し得るものである。従って本篇に於ける効果とは単に罹患致死効果を意味する」との説明もある。そうした前置をへて具体例が登場する。

「昭和十五年寧波戦例における第一次感染発現状況を例示すると第一図の様である」

一〇月二八日に始まる折れ線グラフが、一二月八日までの感染者数を示している。数えてみると総数は一一二人である。

古代に遣唐使船が目指した港灣都市として知られる浙江省の寧波では、四〇年一〇月二七日に飛来した日本軍機が麦や綿を大量にまき、その直後からペストの流行が始まったことが、中国側の記録な

どで確認されている。

この年の七月に日本では第二次近衛文  
 鷹内閣が発足。ヨーロッパではナチス・  
 ドイツの攻勢で六月にパリが陥落。九月  
 には日独伊三国同盟が調印された。中国  
 での戦争は泥沼の様相を呈しており、寧  
 波でペストが猛威をふるっていた頃、日  
 本では紀元二六〇〇年の記念行事が盛大  
 に行われていた。

中国の被害者や遺族らが日本政府を相  
 手取ったいわゆる戦後補償訴訟で、二〇  
 〇〇年に原告側が提出した鑑定書は、寧  
 波での被害者を一〇九人としていた。追  
 加調査を踏まえた二〇〇四年の鑑定書は  
 一一二人としている。グラフの数字はよ  
 く符合するようにみえる。

論文はここから先が本題だ。一次感染  
 に対して二次流行はその何倍に拡大する  
 のか。その方程式の組み立てである。

算定の根拠として、ここでさらに具体  
 例が登場する。

「従来の作戦等によるPXの効果は第  
 一表の通りである」

そう明示し掲げられた第一表「既往作

戦効果概見表」には、六つの「攻撃」で  
 使用したPXの量とその「効果」が示さ  
 れている(①は一次感染、②は二次流  
 行)。

・四〇年六月四日、農安(吉林省) PX  
 五ㄩ ①八人②六〇七人

・同年六月四日、農安大賚(吉林  
 省)一〇ㄩ ①一二人②二四二四人

・同年一〇月四日、衢県(浙江省)八ㄩ

①二一九人②一四五〇人

・同年一〇月二七日、寧波(浙江省)二

ㄩ ①一〇四人②一四五〇人

・四一年一月四日、常德(湖南省)

一・六ㄩ ①三二〇人②二五〇〇人

・四二年八月一九日、広信・広

豊・玉山(江西省)一三一ㄩ ①四二人

②九二一〇人

六回の細菌攻撃による「効果」は、一  
 次感染が六九五五人、二次流行が二万五二  
 五一人、総計では二万五九四六人だった  
 ことになる。農安と大賚は鉄道でつなが  
 っており、広信・広豊・玉山もそうだが、  
 移動しながらいくつかの場所にまいたと  
 の意味と考えられる。

### 細菌戦解明の経緯

徐々に内容がみえてきたが、金子論文  
 が出現した意味を考えるために、細菌戦  
 をめぐり何が今も不明なのかを確認して  
 おこう。

731部隊の存在が一躍知られるよう  
 になったのは一九八一年だった。作家の  
 森村誠一氏の『悪魔の飽食』、科学史研  
 究者の常石敬一氏の『消えた細菌戦部  
 隊』が刊行され、旧満州で人体実験が日  
 常的に行われていたとの多数の証言や論  
 文の分析、アメリカで発見された記録の  
 紹介などは、「戦争の被害者」として生  
 きることになれていた戦後の日本人の意  
 識に衝撃を与えた。アメリカではジャー  
 ナリストのジョン・パウエル氏が情報公  
 開法で入手した文書をもとに、戦犯に問  
 わないことを条件に731部隊の人体実  
 験の成果をアメリカが独占的に入手した  
 事実を明るみに出した。

731部隊の実態を解明しようとの研  
 究者やジャーナリスト、市民らの動きは  
 広がり、さらに詳細で具体的な資料を発

掘する。

日本軍の細菌兵器を調べるために戦後まもなくアメリカ政府が四次にわたり派遣した調査団の報告書は、八〇年代には概要が相次いで明らかになった。ソ連が行ったハバロフスクでの戦犯裁判での記録、中国の戦犯管理所における告白録なども順次もたらされた。

九〇年代になると、軍人や軍医の日記や備忘録といったものが発掘された。731部隊との連絡・調整を担当した井本熊男陸軍参謀の業務日誌は代表的存在で、細菌兵器を使用したことを物語る記載が多数確認された。

そうした作業を通して明らかになった細菌兵器をめぐる歴史を、ごく簡単にまとめれば以下のようになるだろう。

それは石井四郎の提唱で一九三二年に陸軍軍医学校に防疫研究室が設置されたことに始まった。第一次世界大戦での経験から二五年に結ばれたジュネーブ議定書には、化学兵器にくわえて細菌兵器の使用禁止も盛り込まれていたが、開発や製造は許容されていた。

部隊としての正式な発足は三六年で、

「関東軍防疫部」が編成され、石井が部長にすわった。三八年には黒竜江省ハルビン郊外の平房で施設の建設が始まり、石井が戦後に語った言葉によれば「丸ピルの一四倍半」という巨大な施設群が整備された。鉄道も飛行機も備え、最盛期には隊員三〇〇〇人を数えた。

関東軍防疫給水部と名乗るのは四〇年で、翌年には関東軍731部隊と改称した。戦場における飲料水の供給、伝染病の予防といった業務もあり、戦線の拡大にともないアジア太平洋の各地に同様の部隊が設けられた。平房の本隊は石井部隊と、東京の防疫研究室や各地の部隊とそのネットワークを含めると石井機関と呼ばれた。

### 「隠蔽的ない」とする日本政府

一九九〇年代になると、中国で被害者や遺族が名乗りを上げ、体験や記憶を語り始め、記録が探し出された。集まった資料や証言は、戦後補償訴訟に証拠として提出された。

一番の判決は二〇〇二年に言い渡された。731部隊が衢州、寧波、常德などでペスト菌を感染させたノミを空中散布したり、コレラ菌を井戸や食物に混入させたりという細菌戦を実施し、その結果、多大な犠牲者が発生したことは認められた。原告に請求権がないとして訴えを退けた。二〇〇五年の控訴審判決も基本的に一番を踏襲し、二〇〇七年に最高裁が上告を棄却し、確定した。

この問題に対する日本政府の考えは、川田悦子衆議院議員の質問主意書に対する二〇〇三年一月一日付の小泉純一郎首相名の答弁書に示されている。

「いわゆる731部隊が旧日本軍の関東軍防疫給水部のことであること及び他の日本軍部隊にも防疫給水部が存在したことは、旧日本軍の関連資料を保管し、公開している防衛庁防衛研究所図書館に保管されている文書から明らかになっている」

「しかしながら」として、「外務省、防衛庁等の文書において、関東軍防衛給水部等が細菌戦を行ったこ

とを示す資料は、現時点まで確認されていない」

と主張。そのうえで、

「細菌戦に係る事実調査等については、本件の性格や時間的な経過にかんがみれば、更なる調査を行い、明確な形で事実関係を断定することは極めて困難と考えらる」

731なる部隊が旧日本陸軍に存在したことは認めるが、資料がないので何をしたのかはわからない、というのが日本政府の基本姿勢なのである。軍人の業務日誌や関係者の証言ではなく、政府内の公文書でなければ認めないが、そんなものは出てくるはずがないとの考えが表明されている。

金子論文集は、そうした状況に登場した。「既往数次に渉る作戦」を示した「PXの効果略算法」は、731部隊が細菌戦等を行ったことを示す公文書ではないのだろうか。要素を一つずつ検討してみよう。

「陸軍軍医学校防疫研究報告」（防研報告）とは何なのかから始めよう。

アメリカの国会図書館で防研報告の「第二部」が八〇〇点ほど確認され、二〇〇五年に不二出版から影印本として出版されている。その解説を手がけた常石敬一氏は『医学者たちの犯罪組織』などの著作でも防研報告に論及している。それらを総合してみる。

「一九三九年には731部隊の姉妹部隊が北京、南京、それに広州に設置されるが、その頃から陸軍内部では石井四郎を長とするこれら部隊と陸軍軍医学校防疫研究室（防研）を一体のものとして石井機関と呼ぶようになった。防研は石井機関の中枢であり、防研が軍内外の研究者ネットワークを組織し、統括しており、情報が集まっていた」

そうした防研にとどまらない石井機関の研究紀要、それが防研報告で、一部と二部とがあった。二部には大学など軍以外の研究者も多くが論文を発表していた。八〇〇点が見つかった二部に対して、金子論文集の出現前に確認されていた一部はわずかに五点。その違いを常石氏は、次のように説明している。

「二部には㊦とそうでないものが混在しているが、一部の表紙には下の四角で囲った部分の上方に『軍事秘密』と印刷されており、全てが秘密文書であることが分かる。また本文の印刷に関してみるとどちらもタイプ印刷だが、二部は数百年の印刷に耐えるものだが、一部は謄写版印刷でせいぜい百部程度までしか印刷できないものである。印刷の違いは、一部の発行部数が二部よりもはるかに少ないということだろう」

「軍事秘密」などの体裁は金子論文集もまったく同じである。

一部と二部で違っていたのは、何よりその内容である。常石氏はこう分析する。「一部にはこうした、きわめて実際的、この場合は実戦的な論文が掲載されている」

そして、四五年八月一四日に陸軍次官名で重要書類の焼却命令が全軍に出され、防研でもすべてを焼却したとの証言を常石氏は紹介している。

防研報告が陸軍内の公的な文書であることに何か疑いはあるだろうか。

## 生物戦について最もよく知る人物

二部よりも軍事的秘密性の高いのが一部であることもわかったが、金子論文集は八点のうち七点が一部である。それだけ秘密性の高い研究を任された金子順一軍医とはどのような人物だったのだろうか。位置と役割を考えてみよう。

『日本陸海軍総合事典 第二版』（二〇〇五年、秦郁彦編、東京大学出版会）に名前があった。それによると一九一三年の生まれ。没年は不明ながら死亡している。旧制富山高校を経て三六年に東京帝大医学部卒。軍医となり近衛歩兵第一連隊に勤務。三七年七月に関東軍防疫部員、三八年七月には軍医大尉に昇進した。四一年四月に軍医学校生となり、四二年八月に軍医少佐に昇進し、四三年三月には軍医学校部員、同年四月には第九技研所員を兼任。四五年八月三一日に復員、四九年一月に東京大学から医学博士号を受けた。五〇年九月から七三年三月まで武田薬品工業勤務。

軍歴のほとんどを石井機関で過ごし

いたことがわかる。兼任した第九技研とは川崎市登戸にあった陸軍の謀略研究機関。戦争の後半に金子は風船爆弾に細菌兵器を搭載する研究を手がけたとも指摘されている。

金子の名前は、アメリカの調査報告書にも登場する。日本軍の細菌兵器の実態を調べるためにアメリカは敗戦からの二年間で四次にわたる調査団を日本に送りこんだ。

第三次調査を担当したのが国防総省化学戦部隊のノバート・H・フェル博士で、報告書が二点確認されている。そこにはこんな記載がみえる。常石氏の『医学者たちの―』から引用する。

「生物戦について最も良く知っているのは増田、金子、そして内藤である」

増田とは731部隊の総務部長などをつとめた増田知貞、内藤とはミドリ十字の創立者として知られる内藤良一で、金子が今回論文集の発見された金子である。

### フェル報告での言及

こうも報告している。

「金子は中国に対する生物戦の試行の結果を知っており、これら試行ではペスト菌も使われた」

報告書にはフェルが具体的に入手した資料が列記されている。社会経済史研究者の松村高夫氏の『論争七三一部隊』から引用する。

「爆弾あるいは飛行機からの噴霧による細菌戦病原体散布のさいの粒子のサイズの決定および水滴の飛散について、理論的に・数学的に考察をした興味有るレポートを得た」

「中国の市民と兵士に対して十二回の野外試験を行った。その結果の要約、および関連した村と町の地図が提出された」

フェル報告でわかっているのは総論部分だけで、具体的な各論は明らかにならなかったことがなかった。

金子論文集はフェル報告で存在が示されたながら、未確認のままの各論なのではないのか。主論文の「雨下散布の基礎的考察」は細菌を飛行機からまいた時の広がり方や落下の仕方を追跡したもので、「飛行機からの噴霧による細菌戦病原体

散布のさいの粒子のサイズ」などが多数の数式で示されている。フェル報告とよく符合する。

飛行機からの病原体の散布は、細菌兵器開発にとって最も重要な要素だった。

常石氏は『医学者たちのー』でこう指摘している。

「フェルたちが強い関心を示したのは次の二点だった。第一は増田が明らかにした炭疽菌とペスト菌の人体に対する最低感染量だった。第二は金子による噴霧した細菌等の粒子の大きさの測定方法だった。

現代の生物戦はこの二つの技術を組み合わせた方法を採用している。一定数の人間に感染を引き起こさせるのに十分な量の病原体を、一番拡散しやすい大きさの粒子として噴霧する方法が一般的である」

金子は石井機関の枢要な位置にあり、機密性の高い研究を担当していたのだ。

### 「試行の結果」報告か。

それでは「PXの効果略算法」に載っ

ていた「既往作戦効果概見表」は、金子が知っているとしてフェルが報告しながら、これまで明らかになったことのない「中国に対する生物戦の試行の結果」なのだろうか。

それを考えるために、この表に記された内容に踏み込んでみよう。

まず日時と場所だが、四〇年一〇月の衢県以降の四カ所への攻撃は、中国の現地の医師や行政の記録や目撃証言と一致し、日本側の記録とも合致する。例えば「広信・広豊・玉山」は引き上げる時に細菌をまく計画だったが、表にある八月一九日は広信と広豊から、二〇日は玉山から日本軍が撤退した日にあたる。

冒頭に記された農安と農安大賚は、ペストの流行は確認されていたが、自然発生との見方もあった。金子論文の出現で、731部隊による細菌戦は満州国の首都・新京からわずか六〇キロの地で始まっていたことが明らかになった。

農安への攻撃は、石井の持論を検証するための実験だった形跡がある。どこでペスト菌をまけばいちばん効果が大きい

のか。論文は石井の考えを紹介している。「従来大流行のあった場所、特にそれが持続した場所はその流行の大小に応じて多少のペスト素因がある訳である。大流行の地では外因は大きく、小さい流行しか起こらぬ土地ではこれが小さいと考えるのが至当である」

農安はペストの流行を繰り返していた地域で、流行は六月頃に始まり、夏の終わりの九月頃にピークとなり、冬の到来により終息するサイクルもわかっていた。そうした事情を検討して農安の六月を選び、まず五グラムをまいたのだろうが、ペストはこの年の秋、新京に飛び火する。先に見つかっていた防研報告一部には、イヌノミのペスト感染能力を実験した論文が含まれている。新京のペストが日本人経営の犬猫病院から始まり、そこには農安から持ち込まれた犬が入院していたので、それを感染源とみての研究だった。新京では日本人も多く犠牲になったのだが、石井たちは仰々しく防疫隊を組織して新京に乗り込み、献身的な医師として振る舞っていた。

次にこの表にある数字を検討してみよう。

一次感染者の数が現地に残る記録と整合することを先に紹介した寧波は、その後、日本軍が占領し、ペストの流行具合を調査したことがわかっている。

『吉林鼠疫流行史』（一九七三年）によると、農安県の四〇年の発病者は五五一人で、四七一人が死亡した。満州国内の農安や大賚は731部隊にとっては支配地域であり、詳しい調査が可能だったはずだ。

その他の地点も、一次感染者数は、現地の記録などとそれなりに対照する。密偵を放ったといった記録も確認できるので、支配地域以外でも何らかの根拠がありそうだ。

しかし、二次流行となると、とてもそのまま鵜呑みにはできそうもない。衢県の九〇六〇人などという数字は記録にはまったく見あたらない。中国細菌戦被害者連合会会長の王選氏によると、これは、現地で明らかにしている四八年までの被害者の数倍に当たる。フェル報告は

「一二回のうち成果があがったのは三回だけとされ」と記している。

だが、それは単純に被害がなかったことを意味しないことが近年の調査でわかってきた。悲惨な被害は封じ込められていたのだ。

一次感染三一〇人、二次流行二五〇〇人と表にある常德では、前年の寧波での経験が伝わっていたので日本軍機が投下したものがペスト菌だとの疑いを持ち、防疫活動が素早く始まり、被害は一〇〇人程度にとどまったとの見方が強かった。

ところが、二〇〇五年に現地でもまとめられた「細菌戦被害者名簿」によると、流行は二三の県、七〇の郷鎮、四八七の村落におよび、被害者の総計は七六四三人にのぼる。

**「石井の唱えた説をもちに隠された被害者」**

農村部には当時医療機関がなく、統計をまとめようがなかったという事情もあったようだが、それ以上に大きかったのはペストの残虐性だった。現地での多年の調査を『中国民衆の戦争記憶』として

まとめた文化人類学研究者の聶莉莉氏によると、ペストとわかると防疫のために家が焼かれるので、家族が死んでも隠した。感染すると被害者であると同時に加害者となってしまったため、恨みや不和を生み出し地域の伝統社会を破壊した。何

よりこの病気による死に方は無惨だった。

死者の姿は家族や親族によって懸命に隠されたのだ。そうした悲劇は間歇的に繰り返され、七〇〇〇人を超えるという常德の犠牲者は、長年にわたる累計だ。

早い段階で石井が放ったという密偵は、どこまで正確な実態をつかむことができたのだろうか。そんな疑念を抱きながら論文を読み進めると、釈然としない点に次々遭遇する。

この論文は、石井が唱えた説をもとに組み立てられている。それによると、感染の広がりにはA（外因）、B（媒体）、E（病原）、D（内因）、O（運用）の関数として考えることができるという。そして総感染者は、一次感染者の二〇〇倍と仮定するというのである。根拠だという「概見表」の数字を単純に計算すれば二



次は一次の三六倍。それも元来、信用性に乏しい過大なものだ。いくらひねってみても二〇〇倍などという数字は出てこない。

散布の仕方による違いもほとんど考慮されていない。「概見表」が示すPXの量は場所によって大きく異なるが、グラム単位の地点は地上で、キロ単位は飛行機を使って空中からまいたからだ。空中からまくと量が多いのは、広い範囲に及ぶこともあるが、落下によるノミの損傷が多いからのはずだ。落下したノミはどのぐらいの傷を負うかとか、負傷したノミはどのぐらいの感染能力を保持しているかといった研究も行われている。

### 細菌攻撃は自軍に痛手を与える

しだいに、論文の性格が見えてきた。他の七つは何らかの実験の結果と分析だが、この「PXの効果略算法」論文は机上の作業。何より気になるのは、四三年一二月という論文の日付である。

「概見表」で六番目に出てくる四三年八月の玉山を最後に、日本軍による細菌

攻撃は姿を消している。この年の四月、日本本土を初めて空襲したアメリカ軍の爆撃隊は空母を飛び立ち、中国の国民党支配地域に降りた。玉山などの攻撃は、空襲に利用された一帯の飛行場を破壊するとの作戦だったが、日本軍にはコレラや赤痢、ペストなどの伝染病が蔓延した。感染者一万人以上、死者千数百人ともされる。731部隊による攻撃は何よりも日本軍に痛撃を与えたのだ。

大失敗で損なってしまった威信と発言力。それを取り戻す機会が金子が論文を書いた頃にめぐってくる。手の打ちようのない戦況を挽回する手段にPXを使えないかとの検討が陸軍内部で始まるのだ。

日本現代史研究者の吉見義明氏らの『七三一部隊と天皇・陸軍中央』によると、この年一二月には、細菌兵器の生産計画が議論されている。規模を一〇倍にする案、その半分とする案、そして現状維持という三案が検討されていた。また石井は「対米英戦」プランを陸軍省軍事課に提出し、細菌兵器を受けた患者の七七%から九〇%は死亡するとし、ビル

マ・インド・中国・ニューギニア・オーストラリア・太平洋島嶼その他の一地区を順次攻撃するという案を示している。

石井が示したという攻撃目標の地名は、金子の論文の後段にそろって登場する。どこで、いつ使えば有効なのかを、温度や湿度を踏まえて検討したとして、PX一キロを使えば、ビルマでは一万一二〇〇人の感染を想定できるといった具合に結論づけている。

ジャーナリストの青木富貴子氏は著書の『731』で、防研で金子の同僚だった浅見淳軍医の証言を紹介している。

「やった主な仕事というのは、サイパンとかグアム、テナンの基地を細菌で毒化できないかということだった。それで恐らく石井さんは初め参謀の連中に『できます』と言ったんだろうと思う。それでサイパンやグアムの面積を出して、どれぐらいの有毒ノミを落とせば良いか。そのノミを養うためのネズミはどのぐらいか。そうしたこと全部計算させられたんだ。ところが、計算してみるとそれは莫大なもので、とてもとても日本には

できないというような数字が出たのでしよう。いろいろ交渉したり、折衝があった。昭和二〇年七月には中止命令が出た」アメリカ軍を標的にした細菌戦の実施を主張するために、石井にはそれらしい説得材料が必要だったのだろう。それで腹心の金子に命じてこの論文を書かせたのではなかったのか。

その論文を貫くのは驚くばかりの非論理性である。もともと意味のあるとは思えない方程式なのだが、それに恣意的な係数をはめ込み、もつともらしい結論を導き出す。狙いは組織の防衛と保身としか思いようがない。こんなことで戦争の方針を決めようとしていたのかと暗澹とした思いにとらわれる。

大規模な細菌戦は結局採用されなかったが、それはこの論文のエセ科学構造が軍内部で問題になったからではなかったようだ。中国側の被害の訴えをもとにアメリカが強い警告を発したからだと思われる。細菌攻撃をすれば、必ずそれ以上の報復をする。

金子の論文には、こんな一節もある。

「B、E、Oの値の推定についての理由は各作戦の状況を詳記する事になるので省略する。細部は各作戦詳報を細密に参照されたい」

作戦詳報とは、作戦の終了後に上級司令部に提出する報告書である。金子論文の末尾には参考文献として「昭和十五年から十七年のホ号作戦戦闘詳報」「ホ号作戦効果情報」が示されている。「ホ号」とは細菌戦との意味である。「特殊戦原則」「新医学兵器の完成」といった文献もほかに並んでいる。

論文の内容、論文の書かれた背景もみえてきた。表に示された感染者数の信頼性には疑問も浮かんた。だが、そうした事情を勘案しても、この論文が出現した意味は大きい。日本軍が組織的に中国でペスト菌をまいたことを明確に記している。細菌兵器の開発を手がけた当事者による公文書によって、そのことが確認されたのは初めてだ。

### 戦後に与えられた歴史

戦争での加害や植民地支配など歴史を

めぐる近隣諸国との軋轢に、いらだちを覚えていて日本人は多いようだ。「いつまで謝らなければいけないのか」「問題は国家間で解決済みだ」といった主張はことあるごとに聞こえてくる。731部隊をめぐる問題もその一つだろう。

だが、過去がなぜ過ぎ去ろうとしないのか。その理由も金子論文は示しているように思えてならない。

歴史と向き合ったとして日本と比較される旧西ドイツは、ヨーロッパで生きてゆくために和解に取り組んだという。フランスやオランダ、ポーランドやイスラエルなどと和解を果たさなければ、復興も発展も安全も確保できなかった。ドイツの歴史教育を研究する近藤孝弘氏によると、過去を国家間の問題としないための歴史政策が、ドイツには存在する。

それに対して、日本はどうだろう。アメリカだけを見ていけば困らない年月を過ごしてきた。戦争責任を問われたのはごく一部だけで、多くの日本人は被害者意識を抱いて戦後を過ごすことができた。戦前のできごとは、戦後空間とは非連続

な過去となった。

金子は七六年に月刊『公衆衛生』に「予防接種雑考」という随筆を載せている。ジェンナーやコッホの例を示しながら予防接種の歴史を伝える内容だが、「どのようなものが予防接種の目的にしているのかを見きわめるためには、人体での有効性の比較を行った上できめなければいけないわけである。前に二、三の人体実験の例を述べたけれども、あのような実験は自由国家ではほとんど実施が不可能になってきた。時代の変遷である」と記している。

日中の国交回復の四年後、『悪魔の飽食』などにより指弾を浴びる五年前のものだが、まったくの他人事である。だが、それは金子ひとりの問題ではないはずだ。東京大学の教授たちは、どのような思いで金子論文集を審査し、医学博士号を与える決定をしたのだろうか。

そうしたことが可能だったのは、冷戦という緩衝剤で日本が分厚く守られていたからだろう。靖国問題にしても、外国向けと国内向けの姿勢を使い分け、日本

政府はその場をしのいできたが、それができたのは、被害を受けたアジアの人々の声が開発独裁型の政権によって押さえ込まれていたり、鉄のカーテンによりさえぎられていたからだだったはずだ。

細菌戦の被害者たちが声を上げるのは、冷戦構造がゆるんだ九〇年代に入ってからだ。交流が深まるにつれて、たがいの内情もみえてくる。一部の軍国主義者たちによる仕業だったとして国交は回復したが、どこかおかしい。何しろ細菌兵器を使っていかに中国人を殺したかという研究に、東京大学は、戦争を反省し民主化したはずの戦後になって博士号を贈っているのだ。

「私たちは決して忘れな

戦後補償訴訟に関わり、中国に通い続けてきた一瀬敬一郎弁護士は、最近気になることがあるという。「日中戦争は不可避」という声を中国で頻繁に聞くようになったというのだ。「日本は反省をしない。それならやつつけなくは」とのい

中国細菌戦被害者連合会は昨年、中国政府から団体として認められた。そのことによって社会活動の幅が広がるという。会長の王選氏はいう。

「時間がたてば忘れると日本政府は思っているかもしれないが、大間違いだ。私たちは決して忘れない。日本政府に言いたい。持っている資料を出しなさい。世の中にこれ以上迷惑をかけるな」

「資料がない」と日本政府は主張するが、免責を条件に独占的に入手したという731部隊の資料を、アメリカ陸軍は「日本政府に返還した」とアメリカ議会の公聴会で明らかにしている。そのなかには今回見つかった金子の資料も含まれているはずだ。

「貧者の核兵器」と呼ばれる細菌兵器。日本はいつまで貧者であり続けるのか。そんなことが問われているような気がして仕方がない。

\*資料の引用にあたっては旧仮名遣いと漢字の旧字体は現代のものにかえた。